

津田正夫先生の定年退職にあたって

産業社会学部長 國廣 敏文

津田正夫先生のご定年退職にあたり、学部を代表して、ご挨拶と先生の経歴紹介をさせていただきます。

教育・研究面を含めた略歴

さて津田先生は、1943年8月のお生まれで、1966年に京都大学経済学部経済学科をご卒業後、すぐに日本放送協会（NHK）に入局し、30年近くにわたって報道番組の制作・開発などに従事されてきました。長年にわたるジャーナリストとして報道現場での経験を活かす形で、1995年4月からは東邦学園短期大学経営情報科教授となり、ジャーナリズムやマスメディアに関する教育と研究をつみ重ね、2002年4月に立命館大学産業社会学部教授として赴任、今日にいたるまで7年間教鞭をとられ、この3月にご定年をお迎えになることとなりました。

産業社会学部ならびに社会学研究科では、メインの科目として「パブリックアクセス論」や「映像ジャーナリズム論」、「メディア制作」等を担当しつつ、基礎演習、企画研究、プロジェクトスタディーズ、専門演習、卒業研究等を、大学院でも、演習系・実習系科目を中心に院生指導を行うなど、大勢の学部学生・大学院生を育ててこられました。

先生の教育・研究は、何よりも、先生がお書きになった著書や論文名のキーワードの中に示されているように（例えば、「市民との共生は可能か」、「市民とメディア」、「市民社会とメディア再生」、「市民の挑戦」、NPO…）、つねに市民や社会の立場から、メディアやジャーナリズムの歴史と現状、政策的課題への理解と、それらに対する姿勢の確立を学生・院生に促そうという精神で貫かれていると思います。

こうした姿勢は、先生の教育実践にも反映されておりまして、NPO放送局「京都コミュニティ放送」や、障害者向けNPOテレビ局「目で聴くテレビ」、在日外国人向けコミュニティ放送「FMわいわい」などと連携して、市民とメディアが関わりながら展開する新しいメディア教育カリキュラムを開発・定着させてこられました。さらに、学部の少人数教育プログラムの中では、実際にラジオ/テレビ番組、website、フリーペーパーなどを企画・制作・放送・研究させることで、実践的にメディアの生成過程や課題を学ばせ、それらの成果を現場メディアや公共空間を使い発表してもこられました。またフィールド調査によって、放送局が抱えている課題を提起し「市民参加番組」を創設させたこともありました。

このような津田先生による、新たな試みへの挑戦を含む教育実践は、受講生に勇気と自信を与えたと私は確信しておりますし、受講者からは毎年数名ずつではありますが、テレビ局やマスコミ関連業界への就職者も出始めました。こうした点からみて、津田先生が本学部におけるメディア教育の発展に果たされた役割は非常に大きく、大変感謝いたしております。

学内行政活動

他方で、学内の教学を支える点でも、2003年度には生涯学習・社会人担当主事、その他、教員採用人事委員会委員長などの職務を務められ、学部教育ために貢献されてきました。

学会活動、社会活動・社会貢献

学外の活動についてご紹介させていただきますと、学会関連では、日本マス・コミュニケーション学会の理事を2005年から2年間務められました。社会活動・社会貢献の面では、1990年代初めより中部地区で女性問題に関する懇話会委員となられたのを皮切りに、現在までお続けになっておられる委員だけを挙げても、「市民とメディア研究会・あくせす代表」（1998年4月～）、「京都メディア・フォーラム代表」（2004年4月～）、「碧海・西尾幡豆映像祭Vフェス2004 審査委員長」（2004年11月～）、「聴覚障害者映像フェスティバル in さがの 審査委員」（2004年11月～）、「NHK全国大学放送コンテスト 審査委員」（2005年12月～）などがありますし、最近10年の間には、アメリカ、カナダ、ヨーロッパ、台湾のメディア調査団の団長も歴任されて、グローバルに、そしてローカルにご活躍されております。

むすびにあたって

このように津田先生は、大学や社会での教育や社会活動それぞれの面で、大いに活躍をされてきました。先生は、今年定年を迎えられますので、「ごゆっくりとなさってください」と申し上げたいところですが、まだまだお元気で若々しい気持ちとチャレンジ精神とをもっておられます。この4月からは、特別任用教授として、引き続き学部教育を中心にお力を貸していただくことになっておりますが、本日はご定年という人生の一応の「節目」に当たりご挨拶をさせていただきました。

今後は、教員の“先輩”という立場で、学部教学に大所高所から色々とお力添えいただければと思っております。私たちといたしましては、津田先生の取り組んでこられた諸課題を、それぞれの立場から引き受けて、今後の研究の推進と、学部・大学院教育に邁進しなければならないと決意を新たにしているところです。

話を締めくくるにあたり、これまでの先生のご業績に敬意を表しますとともに、本学部ならびに大学へのご貢献に感謝申し上げます。これからもお元気でご活躍ください。本当にありがとうございました。

2009年1月14日